見落とされた北斎版本：明治13（1880）年刊『画本唐詩選五言絶句』

エリス・ティニオス（リーズ大学　名誉講師）
E-mail　hispet@leeds.ac.uk
翻訳：松葉 涼子
（Senior Digital Humanities Officer, Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures）

要旨

明治13（1880）年東京の版元嵩山房こと小林新兵衛は、40年前、北斎の存命中にすでに用意されていた版下を使って『画本唐詩選 五言絶句』二巻（Ebi1609およびEbi1673参照）を新刊として上梓した。本書は現在5点のみ海外の所蔵機関で確認されており、日本国内でも5点が知られているばかりである。西洋における参考文献としては4件の先行する短い解説がみられるが、本書について詳しい考察はされてこなかった。欧米での北斎研究の第一人者であるジャック・ヒリアー氏も本書の存在を知らなかったのである。なぜ、研究の俎上から見落とされてしまったのであろう。本小論では『画本唐詩選 五言絶句』を紹介するとともに、その出版の背景をさぐり、注目されてこなかった理由について考えてみたい。

abstract

In 1880 the Tokyo publisher Sūzanbō offered a new Hokusai book for sale, *Ehon Tōshisen gogon zekku*, based on *hanshita-e* prepared by Hokusai forty years earlier. (See Ebi1609 and Ebi1673). It is a prime example of Hokusai's 'Chinese' style. Only five copies have been identified abroad; in Japan five copies have been identified so far. There are just four brief references to it in the Western literature on Hokusai. Hillier did not know it. Why has this fine Hokusai book been neglected? This article introduces the book, explores its publishing history and speculates on the reasons for its neglect.

はじめに

明治13（1880）年東京の版元嵩山房こと小林新兵衛は北斎の新刊本として『画本唐詩選五言絶句』二巻を上梓した。版元が説明するところによると、北斎の存命中にすでに用意されていた版下を使って刷ったものであるとしている。嵩山房は書家の高田彰一郎（緑雲）（1828-1899）に依頼し、北斎の挿絵にあわせて五言絶句の漢詩を後から書きいれた。また、各巻の巻末には詩の翻訳が備わっている。また、版元は当時の名手であった彫師大塚鐵五郎（1880年間に活躍）に版木を彫らせている[1]。大塚鐵五郎は北斎の描く緻密な描写を一寸たがわず再現することを求められた。

本書については、序文も跋文もなく、北斎とのやり取りについては何も記されていない。絵師との関連を示す唯一の資料は1891年に版元が刊行した全95ページにわたる『嵩山房 発兌書目』[2]に関連する記述があることによる。『画本唐詩選五言絶句』について二か所にわかれて記載があり、いずれも内容についての短い解説がある。最初は61ページ目の「詩文歌部」にあり次のように記されている。

> 葛飾北斎画手本　同画本（※筆者注「唐詩選」）　五言絶句　綸子表紙付　全二冊
> 同　金一円八拾錢
> 此書は葛飾北斎先生が晩年に及んで精神を入れて画かれたる真蹟を梓に上せたるものに付き実に人物禽獣の如きも宛然活るが如し画

学に熱心なる諸君は一本を購い其虚ならざるを知り給へ

そして、後の「絵画部」(81-2ページ)には以下のようにある。

葛飾北斎先生画本　綸子表紙政刷(※筆者注「柾刷」)極美本　全二冊　正価　金二円　重量　七十二匁

此書は唐詩選五言絶句全部を北斎先生が晩年に及んで精神を入れて画かれたる真蹟を梓に上せたるものにして人物禽獣の如き宛然活るが如し
目下外国へ輸出になり既に数千部を売捌けり請う江湖画学に熱心なる諸君は勿論彫刻家及び外国に輸出し大利を占めんとするの諸君は必ず試に一本を購い其虚ならざるを知り玉はんことを

両記述ともに共通しているのは、『画本唐詩選』の版下の挿絵は北斎自身の手によるものであり、晩年の北斎の創造性が吹き込まれたものであることを強調して述べるところにある。言い換えれば、絵師の独創性、そして七十代になり制作意欲が最も熟していた1830年代のころにすでに版下が用意されていたということになる。そのころ北斎は『唐詩選絵本』六編(1833年刊)、および七編(1836年刊)の挿絵を担当し、両書とも嵩山房から刊行されている。おそらく嵩山房は『唐詩選絵本』のあと、本書『画本唐詩選』の制作を北斎に依頼していたのだろう。しかしながら、版下を北斎から受け取った後、版元は出版を40年も遅らせなければならなかった。本書の他、嵩山房出版の嘉永三(1850)年刊『絵本孝経』、嘉永三(1850)年刊『絵本和漢誉』など、北斎の没後すぐに出版されている事例があり、版元がなぜこれらの出版物を北斎の存命中に出版できなかったのかは不明である。天保の飢饉の影響など考えられる理由はあるにせよ、実状を知らせる情報は今のところない。いずれにせよ版元は未出版の北斎の版下を価値ある資産として北斎の死後も30年もの間保有していたことになる。

先にあげた、『嵩山房 発兌書目』の「詩文歌部」には『画本唐詩選』は金一円八拾錢とあり、六十ある「詩文歌部」の書籍の中で最も高額である。一方で「絵画部」では金二円とさらに値段があがっており、後の説明では本書の場合は通常よりも厚く、高価な柾目紙を使った特別本であるとしている[3)]。最近になってEbi collectionに新たに豪華版の『画本唐詩選』が所収された(Ebi1673)。目録の記述にあるように、他の諸本と比べて厚く豪華な柾目紙を使用しており、通常のサイズが225×145mmであるのに対し、本書は240×165mmと大きい。表紙も記述にあるように綸子表紙である。目録には当時2円と非常に高額で売られた極美本とあるが、そのような豪華版が確かに出版されていたことがわかる。

『嵩山房 発兌書目』の解説では『画本唐詩選』を「画手本」としており、先に引用した「絵画部」記述では一般に絵を学んでいる読者、また彫刻家が本書を手本とできる ことはもちろん、海外向けの出版物として本書を売って儲けを得たい業者も、必ず一本を購入するようにと述べている。

さらに「絵画部」の解説では「唐詩選五言絶句全部」とあり、本書が「唐詩選五言絶句」の詩を完全に備えたものであると述べているが、それは間違いである。全二巻のうち、前編には全二十六の五言絶句が載り、後編には二十五の詩が載るが、実際の唐詩選五言絶句は全七十四編にわたっているので、二十三編少ない。主として抜けているのは唐詩選五言絶句の後半三分の一にあたる詩であることを考えると、おそらく本書は企画時には全三巻本であったとも考えられよう。しかしながら、版元は三巻まで刊行してはいない。後編に刊記があるところを考えると、二巻で完本として売られたことは間違いなく、『画本唐詩選』は前編、後編の全二編である。残り二十三編の漢詩を載せた三巻の版下は、1880年の刊行にいたるまでの間、紛失されたか、破損されてしまい、出版できなかったのだと思われる。あるはずの三巻目を欠いているとするのであれば、なぜ本書が序文、跋文がないのか理解できる。もしあったとすれば、版元は

なぜ漢詩がすべて揃っていないのか、その理由を読者に説明しなければならなかったからであろう。

明治期には、主に海外の旅行者やコレクターにむけての北斎版本の活発な市場があった。その需要に応じるため、『北斎漫画』、『北斎画譜』、『富嶽百景』などが複数の版元に版権を移されながらも20世紀はじめまで継続的に出版されていたのである。一方で、北斎版本の中でも中国を題材にしたものについては、海外の読者の関心を得なかったのか明治期には出版されていない。例えば、北斎が挿絵を担当した『新編水滸画伝』、『絵本忠経』、『絵本孝経』、『画本千字文』などが中国の小説、教訓書などを翻案したもので、漢詩を題材とする『唐詩選絵本』もその一つである。これらの本については、特に本文が挿絵よりも多く、海外読者の興味を引くものではなかった。しかしながら『画本唐詩選』については挿絵の比重が比較的大きいため、版元嵩山房は海外市場むけにも適すると考え、出版に踏み切ったのではなかったか。

しかしながら、「絵画部」にある解説中、「目下外国へ輸出になり既に数千部を売捌けり」とあるのは版元の誇張である。管見の内では、現在国外で確認できる『画本唐詩選』は5点のみで、アメリカシカゴ美術館、イタリアキオッソーネ東洋美術館、スイスの個人コレクション、イギリスのEbi collectionに二つの諸本が所蔵されている[4]。さらにいえば、外国語で書かれた北斎に関する研究書、解説書でも『画本唐詩選』に触れているのは4点しかない。近世の版本、絵画に見識が深く、大英図書館、博物館の相談役もつとめた研究者ジャック・ヒリアー氏も氏の代表作『The Art of Hokusai in Book Illustration』（イギリス、1980年刊）の中で、本書『画本唐詩選』については触れていない。ここ数十年の間にみる主要な北斎の展覧会にも陳列作品として本書が選ばれることはなかった。【参考・表1】

なぜ、『画本唐詩選』は20世紀、そしてそれ以上の間、研究者やコレクターに知られてこなかったのか。おそらくは、本書が稀少であり、ほとんどの研究者の目に触れることがなかったので、北斎の全作品を評価する上で、その重要性について取り上げることができなかったのだと思われる。もしくは上記表1のところでも注記したように、本書が文献目録などによって整理されたときにタイトルが近似していることから別本の『唐詩選絵本』と混同されている場合もある。または、出版されたのが絵師

表1　『本唐詩選』に関する外国書籍での解説（刊行年順）一覧

刊行年	作者（地域）	書名	注記
1896	Edmond de Goncourt (Paris, France)	Hokousaï (pp. 210-211)	ゴンクールは本文中「Thirty years after the death of Hokusai, in 1879, two volumes based on his designs were published, the *Ehon Tōshisen gogon zekku*.」として『画本唐詩選五言絶句』の挿絵ついて触れているが、氏の言及は挿絵の状況描写、解説のみにとどまり、出版の背景および版元との関連など本書の重要な側面については触れていない。
1931	Kenji Toda (Chicago, USA)	Descriptive Catalogue of Japanese and Chinese Illustrated Books (pp. 260-261)	著者は『画本唐詩選』を『唐詩選絵本』と混同して解説している。 *Yehon Tōshi-sen* (9). Katsushika Hokusai, *artist*. Tōkyō, Kobayashi Shinbei, *publisher. 1880*. Two volumes, complete. 23.5 x 16 cm. Sheets numbered. Vol. 1: 29 sheets; 29 illustrations. Vol.2: 29 sheets; 29 illustrations. This set contains go-gon zekku.
1982	Forrer, van Gulik and Kaempfer (Haarlem, Netherlands)	Hokusai and his school: paintings, drawing and illustrated books (p. 137, no. 97)	著者が解説した『画本唐詩選』はオランダ、ハーグの実業家で和本のコレクターであったヤンセン氏のコレクションを底本としており、欠落があるとする。その内容は本論で参考としたEbi Collection（Ebi 1609）の書誌と一致することから同一本であると考えられる。なお、本文Ebi1609の書誌解題に記したように本解説の底本は刊記が落ちており、刊行に至る背景などについては解説中では触れられていない。
1989	Richard Lane (New York, USA)	Hokusai; Life and Work (p. 310, no. 273)	著者は本書を『唐詩選絵本』の付録として『画本唐詩選』を位置づけているが、本論でも述べたとおり、『唐詩選絵本』は全く別の出版物である。

の死後であったので純粋な北斎作品だと認められなかったのかもしれない。

それを示す一例として、本論で参考にした『画本唐詩選』(Ebi1609) の書誌解題を紹介したい。

『画本唐詩選五言絶句』二冊二巻
所 蔵: Ebi collection (資料番号: Ebi1609)、2018年12月にEbi Collectionに入る。
他諸本と比べると、Ebi collectionには以下の部分に欠落がある。

[前編]
- 原表紙
- 表紙見返し
- 前編一丁表。「明治十二年上梓」の記載がある。
- 最終丁 (二十九丁) 表裏

[後編]
- 原表紙
- 最終丁 (二十九丁) 表裏。つづく刊記に「明治十二年 (版權免許)「明治十三年 (出版)」とある。同じ丁には前後編所収の五言絶句和訳が載る。

コレクション所収時には前後編の二巻が順序を逆にして一冊に綴じられていた。

後編の初丁表には年記がない。よって、それを最初にして後編、前編の逆に綴じ、一冊本であるかのように見せたのである。前編、後編の丁付はそれぞれ別に一から二十九の丁であったので、順序を逆にしても客はすぐに気が付かない。

以上のような操作は本書が北斎の死後出版であることを隠すためであり、前編一丁表と後編最終丁の刊記にある年記部分を削除するためであった。また、後編の最後に全編分の五言絶句翻訳を載せているために、刊記と一緒に抜く必要があったのである。

Ebi collectionに入ったときに元の前編、後編の順で二冊に綴じなおし、後補表紙がつけられた。現在は前編は一丁表を欠き、一丁裏からはじまっている。

現在までに高く評価はされてこなかったものの『画本唐詩選』にみる北斎の挿絵は、漢詩の世界を超えて、さらなる文化的文脈の広がりをもたせたことで、創造性豊かな表現になっている。例えば、前編の最初の見開き (一ウ、二オ) では「詩是有聽画」「畫是無形詩」の対句 (図1) が対になって描かれている。同前編の最後の挿絵 (二十八ウ) では「蒙恬」が筆の発明者として描かれている。後編最初の丁 (一オ) には「馮道」が印刷の発明者として賞賛されており、最初の見開き (一ウ、二オ) には、伝説の皇帝で最初の詩人であった「舜」と五言絶句の発明者である「李陵」を対に描いている。後編最後の挿絵 (二十八ウ) では「薛稷」を墨の発明者として賛辞し、薛稷のすぐ前の見開き (図2:二十七ウ、二十八オ) に異なる二つの墨 (油烟及び松烟、竹烟) の生産方法を描いている。同じ北斎が挿絵を描く『唐詩選絵本』には『画本唐詩選』挿絵にみるような、それぞれの描写に有機的つながりをもたせたような表現をみることができない。挿絵の中で、詩と絵画との結びつきを深く考慮し、詩の原作者と五言絶句の形式について考え、筆と墨とそして印刷の発明者を称賛するというような北斎独自の表現が『画本唐詩選』には見られる。またそれらは、詩の世界を深く理解しながら、記録し、伝えることを目的としており、豊かな創造性を表現しながらも原作の世界を逸脱していないという点でも高く評価できよう。

1788年、嵩山房はすべての五言絶句をのせた『唐詩選初編』を刊行し、橘石峰が漢詩の文の情景を挿絵に描いている。北斎と石峰の挿絵とを比べると、北斎が先行して刊行されていた出版物を参照していることが明らかになる。『画本唐詩選』の中で、石峰の挿絵を下敷きにして描いたと思われる挿絵がいくつか散見するが、図3、4をその好例としてあげる。先行作を参考にして描いたとはいえ、北斎の挿絵は独創的で力強い。『画本唐詩選』は北斎の画業が最も成熟した時期に描かれたもので、その非常に力強い構成力と、緻密で正確な線と、原作の情景をもっとも新しく、面白い描写で挿絵におとしこむ絵師としての力は『画本唐詩選』全体を通してみることができる (図5～8)。北斎の死後に刊行されたものとはいえ、北斎絵本全体を一覧しても『画本唐詩選』の重要性は明ら

かであり、さまざまな知見から注目されるべき作品なのである。

〔注釈〕

1）　彫師の情報は刊記から。大塚鐵五郎は鮮齊永濯画『萬物雛形画譜』（1880年刊）、河鍋暁斎画『暁斎楽画』（1881年刊）の彫りも担当している。

2）　本書の内容については、国立国会図書館デジタルコレクション（http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/897204）にて閲覧することができる。

3）　「柾目紙」については、岩田秀行氏のご教示によるもの。
日本国内では国立国会図書館、京都工芸繊維大学附属図書館、すみだ北斎美術館、秋田県立図書館、千葉大学附属図書館亥鼻分館に所蔵があることが目録から確認できる。国立国会図書館蔵本はデジタルコレクションから公開されている（http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/902409, http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/902410）。しかしながらマイクロフィルムからのコピーとなるために、原作にある素晴らしい彫の質や摺の質感などを判断するのが難しい。

［付記］

本論執筆にあたってはEbi collectionに所蔵される『画本唐詩選』を参照した。画像については立命館大学アート・リサーチセンターが公開している古典籍ポータルデータベース（https://www.dh-jac.net/db1/books/search_portal.php）から閲覧することができる（資料番号：Ebi1609、Ebi1673［豪華版］）。本論で述べたように、『画本唐詩選』は北斎が手がける中国関係の書籍の中でも注目されるべき作品であり、画像が公開されることによってそのことが他の研究者、読者に認められることを願う。

［謝辞］

本論の執筆にあたって、Anna Beerens、Christian Dunkel、Tim Clark、岩田秀行、Henri Kerlen、金子貴昭、松葉涼子、Amy Newland 、山本嘉孝氏からご教示を得た。感謝申し上げます。

図1　葛飾北斎画　明治十三（1880）年刊『唐詩選五言絶句』前編「詩是有聽画」「畫是無形詩」（一オ、二ウ）
224×146mm
（Ebi collection蔵, Ebi1609）

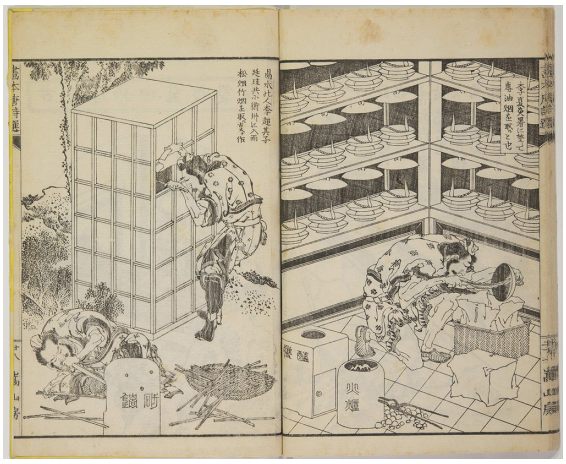

図2　葛飾北斎画　明治十三（1880）年刊『唐詩選五言絶句』後編「李夏」「李超」（二十七オ、二十八ウ）
224×146mm
（Ebi collection蔵, Ebi1609）

図3　橘石峰画 天明八（1778）年刊『唐詩選絵本』初編巻四
銭起「江行無題」（六ウ、七オ）
227×158mm
（Ebi collection蔵, Ebi1609）

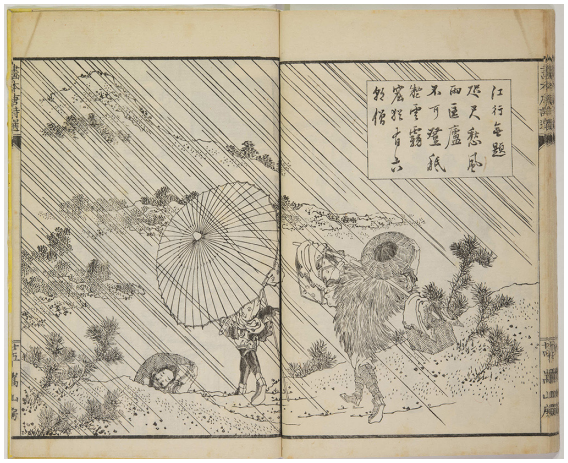

図4　葛飾北斎画　明治十三（1880）年刊『唐詩選五言絶句』後編
錢起「江行無題」（廿四ウ、廿五オ）
224×146mm
（Ebi collection蔵, Ebi1609）

図7　葛飾北斎画　明治十三（1880）年刊『唐詩選五言絶句』後編
岑参「行軍九日思長安故園」（十三ウ、十四オ）
224×146mm
（Ebi collection蔵, Ebi1609）

図5　葛飾北斎画　明治十三（1880）年刊『唐詩選五言絶句』前編
楊炯「夜送趙縱」（三ウ、四オ）
224×146mm
（Ebi collection蔵, Ebi1609）

図8　葛飾北斎画　明治十三（1880）年刊『唐詩選五言絶句』後編
岑参「見渭水思秦川」（十四ウ、十五オ）
224×146mm
（Ebi collection蔵, Ebi1609）

図6　葛飾北斎画　明治十三（1880）年刊『唐詩選五言絶句』前編
王維「班婕妤」（十八ウ、十九オ）
224×146mm
（Ebi collection蔵, Ebi1609）